

〔Ⅱ〕 一つの試み

— 英語科における英詩のイメージ表現 —

宮 田 学

1. 実践のきっかけ

高校段階の英語科においては、一斉授業の形態が最も一般的である。宮田の場合もそうであり、以前、高1の英作文で小グループによる「自由英作文—スピーチ」の試みを行ったことがあるだけで、読解の授業では、もっぱら、ごく普通の授業であった。

授業研究グループで多様な授業形態の実践が始まり、他教科の班学習や発表学習などの授業を見る中で、「自分の教科でも何かできないか」という問題意識を持つようになった。とりわけ、高校女子を対象にした、体育科における創作ダンスの授業（本校研究紀要第22集参照）には、大きな刺激を受け、また、そこからヒントも得た。一方、「生徒の授業への構え」のアンケート結果を整理してゆく過程で、中学生・高校生をとわず、英語の授業には「グループ学習」や「生徒による発表」をあまり期待していないことがわかった（〔Ⅳ〕生徒の授業への構え参照）。これは、そもそも、英語の授業形態としては一斉授業以外の体験が生徒側にほとんどなく、それが、グループ学習などを通じて英語を学べるようにして欲しいという要求が出てこない原因となっていると考えられた。

そこで、「英詩のイメージ表現」の授業をグループ発表学習という形態で実践することにより、教師自身のそれまでの授業を改善すること、および、生徒に新しい英語の授業を経験させることをねらいながら、マンネリ化している英文解釈の授業を方向転換させるきっかけを作ろうと、授業を構想していったのである。

2. 授業の全体像

従来の授業からぬけ出るためには、それにふさわしい教材を見つけることが重要である。この実践を行ったのは、高校2年生のサイドリーダーの時間（週1時間）であり、一学期には、テキストを使用した英文和訳を中心とする授業を展開していた。このテキストを用いてグループ学習を実施することも可能ではあったが、転換をはかるためには、まずグループ学習にふさわしい教材を使用することがよいと考えた。

そこで英詩をとりあげ、しかも、それを和訳するのではなく、絵でイメージ表現するという方法をとるこ

とにした。生徒を男女混合の6グループに分け（1グループ7～8名）、そのグループで英詩のイメージについて話し合わせ、それを共同して絵に描いて、詩の朗読とともに発表することを課題として与えたのである。絵は、OHP用の透明シートにかかせ、絵を重ね合わせたり、動かしたりできるようにした。選んだ英詩は、次に示すような動きのある叙景詩である。

THE STORM

First there were two of us, then there were three of us,
Then there was one bird more,
Four of us – wild white sea-birds,
Treading the ocean floor;
And the wind rose, and the sea rose,
To the angry billows' roar –
With one of us – two of us – three of us – four of us
Sea-birds on the shore.

Soon there were five of us, soon there were nine of us,
And lo! in a trice sixteen;
And the yeasty surf curdled over the sands,
The gaunt grey rocks between;
And the tempest raved, and the lightning's fire
Struck blue on the spindrift hoar –
And on four of us – ay, and on four times four of us
Sea-birds on the shore.

And our sixteen waxed to thirty-two,
And they to past three score –
A wild, white welter of winnowing wings,
And ever more and more;
And the winds lulled, and the sea went down,
And the sun streamed out on high,
Gilding the pools and the spume and the spars,
'Neath the vast blue deeps of the sky;
And the isles and the bright green headlands shone,
As they'd never shone before,
Mountains and valleys of silver cloud,
Wherein to swing, sweep, soar –

A host of screeching, scolding, scrabbling

Sea-birds on the shore –

A snowy, silent, sun-washed drift

Of sea-birds on the shore.

Walter de la Mare

英詩をイメージ化するという学習自体にある意義は何であろうか。それは、ことばで表現されていることがらへと戻ってゆくということの中にある。生徒たちは、ともすると、英語を日本語に訳しただけで満足することが多く、ことばの単なる置き換えに終わっていることに気づかないことがある。ことばは、本来、あることがらや考えを、一定の限界を持ちながらも、他人に伝えるために使用される。伝えられる内容こそが大切にされるべきである。イメージ化するということは、この本来伝えようと意図されている内容を、伝える側の原体験にできるだけ迫りながらとらえようとする1つの試みである。マンネリ化した英文解釈を打破するということは、この点でも大いに意味を持っているのである。

さて、授業は二学期に入ってから、次のような要領で実施された。

第一時 「英詩のイメージ表現」の学習についての説明；グループ分け；英詩の音読

第二時 グループ毎でイメージの話し合い

第三時 同上（2回目）

第四時 イメージの絵画化；（A）各自で意味がつかみにくいところ、（B）グループ内で意見がくい違っているところをメモ用紙に書いて提出（→教師が整理：このメモ用紙をいくつか選んで下に示す）

第五時 グループ発表および相互評価；発表された絵のくい違いに焦点をあてた話し合い（絵の一部を28ページに示す）

<生徒の書いたメモ>

- (A) 第一連の4行めにある“the ocean floor”
 というのは、海のことなのか岸のことなのか？
 (B) 第二連の6行めの“blue”
 というのは、海の青さか？この場合、波に対してなら空の方が合うような気がする。けれども雷がなっているので空は暗いはず。空が暗くて青さがなければ、海も青くないと思う。それとも、暗いのはほんの一部で、あとは青空なのか？とにかく、わからない。

(女子生徒 N. T.)

- (A) Treading the ocean floor →(B)と関連
 (B) (A)の文で、これはカモメを表現しているのか。波または雲を表現しているのかという点において食いちがいが見られた。

第一段全体について、カモメは飛んでいるのか、それとも海岸におりたっているのかという食いちがいが見られた。

(男子生徒 H. N.)

- (A) The gaunt grey rock between
 — between の訳し方？
 Struck blue on the spindrift hoar
 — どういう情景なのか想像できない
 Treading the ocean floor
 — かもめがどのような状態にいるのか？

- (B) 第一パラグラフのFirst there were ~ Four of us …… wild white sea-birds までのところで、かもめはとんでいるというのと歩いているということ意見が分かれた。

(女子生徒 K. T.)

なお、グループ発表の相互評価は、5つの項目について5段階評価で行わせた。項目は次の通りである。

- (1) 詩をどれだけ深く解釈したか
- (2) 絵の構成・できばえ
- (3) 朗読のうまさ
- (4) グループとしての努力・協力
- (5) 全体の印象

3. 授業についてのアンケート

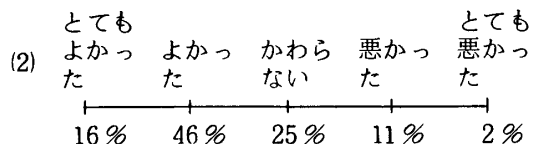
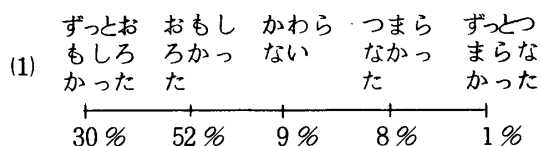
「英詩のイメージ表現」の授業について、次ページに示すようなアンケート（抜粋）を実施してみた。その結果から、従来の英語の授業から抜け出るきっかけをつかむという点、グループ学習についての生徒の受けとめ方の変化という点において、一応の成果があったのではないかと考えられる。

4. その後の授業

アンケートの4および5の項目についての生徒の反応をみると、グループ学習を何らかの形でとり入れることについては支持者が多い反面、グループの分担を決めて教師の代役を果たすという具体的な学習方法については、消極的であることがわかる。「英詩のイメージ表現」を通じて得られた生徒の変化を生かすためのよい方法はないかと考えた結果、次に示すようなテキストを使用した新しい学習形態を工夫して実施した。

＜ アンケートの結果 ＞ (129名)

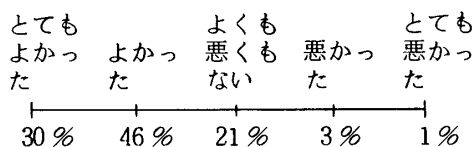
1. 一学期までのテキストを使って解釈してゆく授業に比べて



(3) それぞれの理由を書いてください。

- (1) みんなと話すことが楽しかった (18名)
緊張感がない (18名)
テキストよりもおもしろく積極的にとりくめる (13名)
絵がおもしろかった (10名)
グループでやるのがよい (7名)
イメージをえがくのがよかった (5名)
グループがうまくまとまらなかった (5名)
授業後やらなくてはいけなかった (5名)
- (2) ことばだけの表現よりもよい (14名)
受身でなく活気がでる (7名)
みんなの意見が出せる (5名)
英詩にふれることができた (5名)
いろいろな解釈のできることがわかった (4名)
交流が深まった (4名)
英語の勉強にあまりならなかった (9名)
他人まかせになる (5名)
定期テストのことを考えるとよくない (4名)

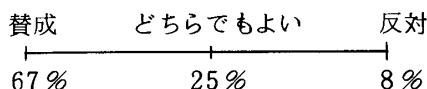
2. グループにしたことは



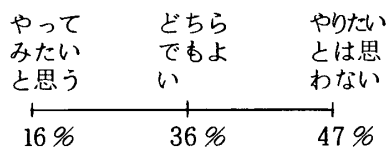
3. この授業を通じて何か感じたこと、得たことがありますか? 1つだけ簡単に書いて下さい。

- ・頭のよい人は想像力が豊かだなあ
- ・みんないろいろなことができるんだなあ
- ・英詩の方がイメージが限りなく広がってゆく
- ・深く裏の裏まで考えた
- ・リズムや詞がスムーズに頭に入った
- ・絵画表現によって本当の理解ができる
- ・絵がへたと再認識した
- ・英文解釈力がにぶった
- ・はじめをかいただけ

4. 今後、サイドリーダーの時間に、何らかの形でグループ形式をとり入れることに



5. たとえばグループの分担を決めて英文解釈のテキストを研究し、先生の代りになってクラスの人たちに教えてあげる、というような授業を



(1) 男女混合のグループを10作り、テキストの英文1題を特に担当して、決定訳を考える。

(2) 各生徒は、あらかじめ10題ずつ予習するとともに、自分のグループ担当分については試訳を書いてくる。

(3) 予習の際には、前時に指示のあった「ポイント」についても考えておく。

※「ポイント」の例

No 181 talking nonsense とは、この場合何を指しているか? (日本語で)

No 185 水中での体の状態を述べよ (絵にかくのも可)

No 187 第一文の主語はどれか? またこの一節

はどんな状況(時)のことを描いたものか?

(4) 授業の流れ

㊦ 10題の英文の音読 (5分)

㊧ 「ポイント」について、指名された人による発表 (5分)

㊨ 「ポイント」について意見が分かれた場合、グループ・バズ (5分)

㊩ グループの見解の交換 (10分)

㊪ 担当の英文の決定訳について、グループ・バズ (10分)

㊫ 決定訳の発表 (10分)

㊬ 次回分「ポイント」の指示 (1分)

5. この試みから何を得たか？

私たちの研究グループでは「授業の追求と改善」をテーマにかかげて研究を続けてきた。授業研究としては、特に、その方法論がまだ確立されていないために、統一的な授業追求の論理に欠けている、宮田のこの試

みについても同様で、これが1つのモデルになるというような実践ではない。しかし、授業の改善という点ではそれなりの成果があった。われわれ現場の教師にとっては、方法論の確立もさることながら、日々の実践の改善こそ重要であるので、今後も、様々な試みを続けたいと願っている。

<グループ発表に用いられた絵の一部>

